印度學佛教學研究第四十八巻第二号　平成十二年三月

『開目抄』と『観心本尊抄』における一念三千法門の説示について

渡邊寶陽

言うまでもなく、『観心本尊抄』は天台大師の『摩訶止観』第五巻の一念三千出処の文章を巻頭に掲げ、以下に法華経の究極の教義を一念三千として究明し、その真意を末法の始めの時代に問い、「三大秘法の開顕へ」という主題の闡明を結論とするのであって、「法開顕の書」と位置付けられる。『開目抄』は流罪の地、佐渡において、身命の危機のなかで印度・中国・日本の精神文化を考察し、仏教の意義を確かめ、その究極としての『法華経』の救いを明らかにする。法華経行者意識から上行菩薩の再誕の自覚の闡明への昇華を明らかにし、人開顕の書と位置づけられている。その枢要に『観心本尊抄』とは角度の異なる一念三千の法門の開示があるのである。もとより、この問題については詳細な論考が多数あることはいうまでもないが、俯瞰的な考察を試みたい。

(1)　『開目抄』における「一念三千論」の開示

『開目抄』は高山樗牛があたかも瀑布のような文章であると述べたように、段落のない文章で綴られているが、後人が執筆の意図を推察しつつ科段を付している歴史がある。「一念三千」という語は、その示される箇所によってその意義の展開があるので、茂田井教亨『開目抄講讃』（序論三章・本論十三章・余論二章）によって考察を進めることとする。[1]

まず［序論］第二章において、「法華経の根幹にある一念三千の教え」を明らかにするなかで次のように述べられる。

［(a)一念三千の法門は但、法華経の本門寿量品の文の底にしづめたり。

(b)龍樹・天親知って、しかもいまだひろいいださず。

(c)但、我が天台智者のみこれをいだけり。

(d)一念三千は十界互具よりことはじまれり。」（定本遺文539頁）[2]

すなわち、(a)すでにここにいう一念三千の法門は天台大師のいわゆる「理の一念三千」を超えた「事の一念三千の法門」を既定の事実として構想されていることを確認できる。日蓮が『開目抄』で語るのは、「法華経の本門寿量品の文の底」に

収められている一念三千なのであって、これは明らかに『法華経』本門に高められた一念三千である。

(c)すなわち、中国の天台大師が『法華経』を理解する上で、「一念三千の論」が最も重要な鍵であることを初めて明らかにしたことを確認する。(d)それは方便品第二の「諸法実相・十如是」の背後にある壮大な理論を［十界互具］と関連して捉え、その［十界互具］によって［百法界］が確かめられるとした。それに［十如］と［三世間］のはたらきを合わせて、「凡夫の一念に三千の法界が具備されている」ことを『摩訶止観』第五巻に明らかにしたのである。この解釈によって、修行者はすべて皆、菩提心を具有することができるかを問い、さらに究極的には仏陀の世界を凡夫の心に具有するゆえんを突き詰めていったのである。(b)このような哲学は天台大師によって『法華経』から発見されたのであるから、それ以前の龍樹菩薩・天親菩薩は知ってはいたものの、それを言説に明瞭にしなかったとするのである。

『開目抄』［序論］の主題は、第一章「儒教・外道に対する仏道の優位なること」の確認、第三章「諸宗が批判されなければならない理由の解明」にある。これらによって精神文化全体への仏教の位置付け、諸経典の位置付けによって『法華経』がその中心をなすことを明らかにする。すなわち、

(a) 但『法華経』計り教主釈尊の正言也。

(b) 三世十方の諸仏の真言也。」（定本539頁）

が、結論的に述べられた日蓮の依って立つ基本である。

日蓮の仏教観が釈尊をはじめとして仏陀御一代の生涯において五つの時間帯を経て『法華経』が明らかにされることを基本としていることはあらためて言うまでもなく、またその五つの時間帯に説かれた経典が、それぞれ化儀の四教と化法の四教の位置付けの上に立脚していることを基準として、それぞれの経典の意味を明らかにしているのである。前者の〈一代五時〉については諸遺文に述べられるほか、数点に及ぶ『一代五時鶏図』等の図録などに図示され、また〈五時八教〉についても同様である。このような結論を、「真実」という語に収斂して次のように述べている。

「大覚世尊は四十余年の年限を指して、

① 其の内の恒河の諸経を〈未顕真実〉、

② 八年の法華は〈要当説真実〉と定め給いしかば、

③ 多宝仏 大地より出現して〈皆是真実〉と証明す。

分身の諸仏来集して長舌を梵天に付く、此の言（ことば）赫赫たり、明々たり。」（定本539頁）

すなわち、『法華経』以前の諸経を〈未顕真実〉と一括し、『法華経』方便品において真実が必ず顕現されることが明らかにされたとして、その趣旨を〈要当説真実〉の語に確かめ、さらにそれは多宝如来の本願に基づく真実の証明において確

定されるとする。すなわち、それを〈皆是真実〉の語によって確かめるのである。もとより、こうした仏典の真実の検証に入る以前に、『開目抄』冒頭に「儒教・外道・内道（仏教）三道論」を展開して、主・師・親三徳を鍵としつつ精神文化の昇華の様相をたどって、仏道の意義を問うているのである。そのうえで、前述のように『法華経』の焦点が「一念三千」の真実を明らかにすることを論じていることを知る。このように『開目抄』はすでに序論において、精神文化の奥義が『法華経』の一念三千に収斂されることを構造的に位置付けているのである。

さて本論に入ると、第四章「二乗作仏論」、第五章「久遠実成論」によって『法華経』の大綱をたどるのであるが、それは決して平面的に語られるのではない。すなわち、第五章において「迹門の一念三千」「本門の久遠」を「（釈尊）一代の綱骨・一切経の心髄」であるとし、そのうち「迹門方便品は一念三千・二乗作仏を説いて爾前の二種の失（とが）一つを逃れ」ることが出来たが、迹門を開いて本門を顕わすことがないために「まことの一念三千」があらわれないし、したがって二乗作仏も決定的とはならない。それに対して、本門が開顕されるに及んで、仏陀釈尊は伽耶城の菩提樹の下で始めて正覚を成ぜられたとする『法華経』迹門までの常識が否定され、久遠の釈尊の教導の心髄が明らかにされるに及んで、「まことの一念三千の法門」が顕現される。

「(a)本門にいたりて、始成正覚をやぶれば、四教の果をやぶる。四教の果をやぶれば、四教の因やぶれぬ。

(b)爾前・迹門の十界の因果を打ちやぶって、本門十界の因果をとき顕はす。此れ即ち本因本果の法門なり。

(c)九界も無始の仏界に具し、仏界も無始の九界に備はりて、真の十界互具・百界千如・一念三千なるべし。」（定本552頁）

(a)の示すとおり、久遠の釈尊の教導が明らかにされることにより、それまで常識とされてきた始成正覚の釈尊の境地を超克した境地が開顕されるのである。すなわち、「一代五時」「五時八教」に要約されるようなこれまで説かれてきた蔵教・通教・別教・円教の悟りの境地は否定され、したがってそれをめざす因行も否定される。

(b)『法華経』以前の諸経、『法華経』迹門において説かれてきた、（十法界のうち）迷いの九法界から仏界に向かう修行の論理は否定され、迷いの九法界もすでに仏界に包まれているという救済の論理が明らかにされるのである。このような本門立脚の教導が「本因本果の法門」（久遠の釈尊の崇高な仏果に、同時的に永遠の修行が内包されているとする法門）として示されているのである。

(c)さらに、その境地が「迷いの九法界もすでに久遠の仏の世界に包まれている」と同時に、「久遠の仏界（仏陀の法界）

が迷いの九法界から画然と超克して存在するのではなく、無始の九法界のなかに内在する」ことが明らかにされるのである。天台大師が『法華経』によって「(悟りと迷いとの)十法界は互いに具わり、有機的にはたらいている」とする十界互具の論理をさらに展開させ、その百界の互具互用は十如是のはたらきを加味すれば「百界千如」の論理となり、さらに三世間の要素を加味して「一念三千」の法門となることが『摩訶止観』第五巻において講ぜられたことは周知のとおりである。その意義が、いま『開目抄』において、あらためて本門の開顕が明らかにされることによって久遠釈尊が超越的に九法界を内包するとともに、同時に九法界に久遠釈尊が内在するという救済の世界として、その昇華したすがたが示されるのである。[3]

第六章「受難を覚悟しての発願」、第七章「法華経の予言の色読」、第八章「諸天不守護の疑問」と進んでいき、法華経行者としての実践の課題が確かめられている。つまり、法華経の行者としての発願と実践、それに対する受難の体験、それにもかかわらず行者への守護が何故ないのかという葛藤が語られていく。

そこから、再び第九章「迹門の一念三千」、第十章「本門の一念三千」において『法華経』の読み方、その世界への思索を深めていく。まず第九章において、一念三千が方便品第二の最初に示される[十如実相]を通して一念三千の境地を示して暗示し、仏陀の本懐を示したことを述べるのである。もとより天台大師の『摩訶止観』を披見すれば、この[十如実相]にこそ一念三千の出処が示されているはずであるが、日蓮は「略して宣べたところである」といい、あるいはそれを聞いた人の境地を時鳥(ほととぎす)の声を夢現つのうちに聞いたことに擬えている。それを踏まえて、第十章では久遠の釈尊の境地に及び、その境地を第十一章「諸宗が本尊を見失うことへの批判」を論じ、第十二章「一念三千仏種論」において一念三千の重要性の認識を迫るのである。

「①法華経の種に依って天親菩薩は種子無上を立てたり。
②天台の一念三千これなり。
③華厳経乃至大乗経・大日経等の諸尊の種子、皆、一念三千なり。
④天台智者大師一人、此の法門を得給えり。」(定本579頁)

つまり、①に天親が『法華論』において、法華経十七異名を論ずるなかで、「法華経の種=種子無上」という義を明示していること。②天台大師の一念三千論のポイントはここにあるということ。③そこから逆に見渡すと、諸大乗経に見える諸尊の種子は、すべて一念三千にあると論断する。④そこから再び、天台大師がただ一人、此の法門を獲得された事の意義を強調するのである。ここでは、もはや『摩訶止観』第五巻の一念三千論は超克されて、一念三千が諸尊の種子であ

り、仏教の根本であることの提示がなされることになる。

このことが解明されたところから、もう一度、末法の法華経の行者の意義が問われていく。第十三章「三箇の勅宣と二箇の諫暁によって法華経の行者なることを確認」する、その最後の部分で、提婆達多品第十二に示される女人成仏について、『法華経』以前に示されたのは「改転の成仏」であるのに対して、『法華経』においてはまさに「一念三千の成仏」が確証されているのであって、したがって『法華経』以前の教示は、『法華経』の真義が明らかにされていない段階の「有名無実の成仏」であるという（定本589頁）。わずかにこれだけの文章で、詳しい説明は行なわれていない。ただ、ここで確認できるのは、姿を変えて成仏したということを「改転の成仏」として位置付けて、真の成仏の姿は「一念三千の成仏」にあることの提示であろう。

ここから第十四章において『法華経』が「未来記の明鏡」であることが宣言され、第十五章「受難をふりかえり、立教宣言に伴う誓願を確かめ」、法華経行者としての誓願実現の行動の背後に第十六章「滅罪を果たして解脱を得る」宗教的境地を告白する。その最後の文章で、仏を求めるそれぞれの理論を否定して次のように言う。

「①但、天台の一念三千こそ仏になるべき道とみゆれ。

②此の一念三千も、我等一分の慧解もなし。

③而れども一代経々の中には此の経計り一念三千の玉をいだけり。」（定本604頁）

日蓮は、一念三千は天台大師の発明だとも言う。しかし、他の箇所では一念三千は『法華経』に備わっているものであって、天台大師はその意義を確かめたに過ぎないとも言う。②ともかく、①の言葉のように、天台大師が解明した一念三千の法門こそ仏に成る道を示しているというのであるが、②の通り、末法の我等衆生はわずかばかりの智慧や理解も持たないという認識を示した上で、③において、一念三千の玉は『法華経』のみに抱かれていることを強調している。この大きな命題は、『開目抄』においては暗示的に述べられるだけであるが、この命題はやがて『四信五品抄』において、「以信代慧」の論理として語られることとなる。

このようにみてくると、『開目抄』が日蓮の半生の『法華経』実践の意義をふりかえり、その『法華経』の未来記（予言）の色読体験をふまえて末法万年の仏教の指針を示すという大いなる誓願の根幹に「一念三千」の日蓮的理解の世界が横たわっていることをあらためて確認することができる。そのうちでも552頁の久遠釈尊の超越具・内在具の宗教的境地の表現は、ある意味では暗示的なものにとどまっているともいえようが、きわめて重要な説示となっているといえよう。同時に606頁の表現は、後年の「以信代慧」という指針と

密接な関連を思わせる。まさに流罪の地、佐渡において滔々と書き綴った『開目抄』に、「一念三千の法門」が高度な宗教的世界として凝縮されていることを推察できよう。

(2)『観心本尊抄』における一念三千法門の究明

『観心本尊抄』は巻頭に『摩訶止観』第五巻の「一念三千出処の文」を挙げ、以下、三十番問答を重ねつつ論を展開している。もとより天台大師が論じた一念三千の意図は、十界互具から百界千如を証し、さらに三世間のはたらきを加えるものであるから、あらゆる法界の互具互用を論ずるものであるが、その究極の課題は凡夫の心に仏界を具することを明らかにすることにある。日蓮は第一問答から第八問答においては、まずその意義を問い（定本702～3頁）、第九問答から第十一問答には百界千如と一念三千との意味の違いを論じ（定本703～4頁）、第十二から第十七問答までは十界互具が凡夫の身にも備わっていることの根拠を『法華経』の経文に確かめている（定本704～707頁）。

このように『観心本尊抄』の第一段の第一章から第四章に至る間に論ぜられるのは、くりかえしくりかえし、我等のような凡夫の劣心に仏界（仏陀の法界）を具有することが許されるかという問題である。一念三千の法門を根拠として、日蓮聖人が『観心本尊抄』において題目受持による成仏を説くというふうに、その結論だけを耳にする者はしばしば、その結論に疑念を抱くようである。しかし、『観心本尊抄』の問答において繰り返し問われるのは、まさにしばしば疑念とされる点についての執拗なまでの追求なのである。

『観心本尊抄』の結論は、当然のことながら『開目抄』と一体でなければならない。しかし、第十七番問答に至る間の問答の内容は、いきなり超越的な久遠釈尊との邂逅にあるのではない。すなわち、第十八番問答の「問うて曰く、教主釈尊は」の下に割り注して「これより堅固にこれを祕せ」と本書を読むに際しての格段の注意事項を示すところから、文脈は一転する。その根幹は『法華経』迹門以前の教主釈尊はただ始成正覚の境地を述べるものであるのみであると厳しい批判を加え、次のように述べている。

「本門を以て之を疑はば、教主釈尊は五百塵点以前の仏なり。因位も又是の如し。其れより已来、十方世界に分身し、一代聖教を演説して塵数の衆生を教化したまふ。本門の所化を以て迹化の所化に対向すれば、一滴と大海と、一塵と大山となり。本門の一菩薩を迹門の十方世界の文殊・観音等に対向すれば、猴猿を以て帝釈に比するに尚及ばず。其の外十方世界の断惑証果の二乗ならびに梵天・帝釈・日月・四天・四輪王、乃至無間大城の大火災等、此等は皆、我が一念の三千か。己心の三千か。」（定本707～8頁）

この文につづいて「仏説たりと雖も、之を信ずべからず」

と、天台大師の所説について疑問を加えている。その上で次の第十九番問答の答に於いて、これらの大いなる難問に対しての教主釈尊の答は、『法華経』法師品の「已今当説最為難信難解」にあることが示される。その意味は次のようなものである。すなわち、法師品には「我が所説の経典、無量百千万億にして、已説、今説、当説あり。而も其の中に於いて、此の法華経、最も為（こ）れ難信難解なり。薬王、此の経は是れ、諸仏の祕要の蔵なり。分布して妄りに人に授与すべからず。諸仏世尊の守護したまふ所なり。昔より已来、未だ顕説せず」と説かれている。その経意は仏教諸経典において「諸仏の祕要の蔵」は最も難信難解な『法華経』に集約されていることが、この法師品に明らかにされており、それを本として統一的な仏教理解に立たなければならないとするのである（定本709頁）。このことは、天台大師の「二門悉く昔と反すれば、信じ難く解し難し。鉾に当たるの難事なり」という所説を重要とする理解と表裏一体をなすものであろう。こうして、『法華経』本門に示される久遠釈尊の教導を認識することこそ、仏教理解の根本としなければならないという視座に帰結することを表明し、「月氏の釈尊・真旦の智者大師・日域の伝教」を内典（仏典）の聖人とする（定本709頁）ことの認識に連結していくのである。このように『法華経』が難信難解であり、それゆえに最勝の法門であることが確かめられると述べた上で、第二十番問答の答において、無量義経・法華経・涅槃経・龍樹菩薩・吉蔵・天台大師等の経・論・釈から演繹されるのは、題目の三十三字段と呼ばれる次の文である。

「釈尊の因行果徳の二法は、妙法蓮華経の五字に具足す。我等此の五字を受持すれば、自然に彼の因果の功徳を譲り与へたまふ。」（定本711頁）

この文の背後にあるものは、これまでも確認してきたとおり、久遠釈尊の世界である。そのことは、この文につづいて「釈迦・多宝・十方の諸仏は我が仏界」であると述べ、「我等が己心の釈尊は五百塵点、乃至所顕の三身にして無始の古仏」であることを明らかにすることを見れば明瞭である。さらに「地涌千界の菩薩は己心の釈尊の眷属」であり、その菩薩が「我等が己心の菩薩」等であることをも明らかにする（定本712頁）のは、久遠釈尊の世界がその果徳にとどまらず、地涌千界の菩薩に示される因行の世界をも包摂するからである。その内奥は、伝統的に本尊段とよばれて尊重される第二十番問答の答の後半に象徴的に述べられている。

第二十一番問答以降は弘通段とよばれる日蓮聖人の『法華経』色読についての叙述である。この間に『法華経』本門の教えが末法に展開されるべきことが未来記として示され、末法万年の軌範として展開することが語られる。そして最後に、

次のような結語が示される。

「天晴れぬれば地明らかなり。法華を識る者は世法を得べきか。一念三千を識らざる者には、仏、大慈悲を起し、五字の内に此の珠を裹み、末代幼稚の頸に懸けさしめたまふ。…。」（定本720頁）

(3)『開目抄』『観心本尊抄』両著の関連

『開目抄』は「法華経の行者は誰なるらむ。求めて師とすべし」（定本599頁）という言葉に表象されるように、末法における法華経の行者の闡明を大きな課題としている。もとよりそれは日蓮が法華経の行者であることを明らかにする結論を生み出すものである。しかもこの場合の「法華経の行者」とは久遠の時間を背景にした意味であって、したがって「仏は小指を提婆にやぶられ、九横の大難に値ひ給ふ。此は法華経の行者にあらずや」（定本599頁）と語られるように、仏陀釈尊も九横の大難とよばれる数々の大いなる法難を受けられたとして、その姿は法華経の行者そのものであるというのである。このような表現に対して、『観心本尊抄』では「自界叛逆・西海侵逼の二難」（内乱・外寇）を法華経に予言する「猶多怨嫉況滅度後」の現象ととらえ、「此時、地涌千界出現して本門の脇士となりて、一閻浮提第一の本尊此国に立つべし」といい、かつて正法・像法の時代になかった大地震・大彗星の出現は仏勅を頂いて大地の下に在る「四大菩薩、出現せしむべき先兆なるか」（以上、定本720頁）と、法華経に予言せられる地涌の菩薩の自覚の境地を明らかにしているのである。それと対応するのが、定本711頁の「自然譲与」の文であろうが、しかし実はその内面の論理である九界即仏界・仏界即九界の論理は、より率直に『開目抄』に明らかにされていると言えよう。

ここに両著の構成が異なり、表現においても微妙な変化を見せながら、肝要な「一念三千の法門」を明らかにしていることが伺えるのである。

1　渡辺宝陽・小松邦彰編（日本の仏典・九）『日蓮』（筑摩書房）参照。

2　『昭和定本日蓮聖人遺文』は「定本」と略称。本稿では送り仮名を本文中に加え、『観心本尊抄』は原漢文を読み下した。なお、頭部の番号は私に付したものである。

3　茂田井教亨『開目抄講讃』ほかに詳細に語られ、諸先師の詳細な記述も多々あるほか、『本化聖典大辞林』中の「一念三千」等の項目がある。

〈キーワード〉　日蓮、一念三千法門、開目抄、観心本尊抄

（立正大学教授・文博）